

## 「標題」のさまざま―現代と脱領域的な視点から―

相田 満

### 《一》はじめに

すでに現代では、「標題」は書籍・音楽・演劇などのエンターテインメントにおける各作品に不可欠な存在になっている。しかも、「標題」が付与される対象はそれだけに限らない。工業・農業・サービスなど、およそ人間の社会生活に関連するさまざまな生産行為にわたっている。

「標題」という概念の適用範囲は広く、古典時代と現代とでは、異なった展開を見せている事例も少なくない。

そこで、本稿では研究の視野を模索する意図もかねて、なるべく広い分野から典型的事例の取材を試みたい。

### 《二》標題音楽と絶対音楽

#### 〔一〕私を束ねないで

わたしを名付けないで

娘という名 妻という名

重々しい母という名でしつらえた座に

坐りきりにさせないでください わたしは風  
りんこの木と

泉のありかを知っている風

（新川和江「私を束ねないで」第四連）

この詩のように、世の中には限定された「名前」や「標題」の存在によって、解釈に創作行動に制限がかかってしまうことを嫌い、あえて命名されることを避けるという気持ちを持つ人もいる。ニックネームなども、その卑近な一例といえよう。

これはまた、人間が長い歴史をかけて生み出し続けてきた知的・文化的活動社会的な生成物には、必ずといってもよいほど「名前（標題）」が存在することへの反発の気持ちでもある。それほどに、われわれの世界は、「名前（標題）」が浸透しており、何者に対しても「名付け」てしまわなければならないような本性への訴えの詩でもあろう。

#### 〔二〕標題音楽

リストが一八五五年に論文「ベルリオーズと彼の『ハロルド交響曲』」の中で命名した用語に「標題音楽」という言葉がある。

当時、あらゆる芸術の本質が「ポエジー」と呼ばれる総体的な概念によ

り発するものと考えられており、詩は言葉、彫刻は形態、音楽は音の言語でポエジーを表現すると考えられていた。

現在、「ポエジー」には、文字通りの詩の意味で理解されるのが通例である。それは、ロマン派時代には詩こそが最高の芸術であると考えられ、その価値観が芸術の本質という意味と不可分の通念を育てていったからである。

詩に対して、音楽はより低い地位に甘んじていた。聴衆は、どのような器楽曲も勝手に「詩化」して聴くことを習慣としており、時にはとんでもない物語が捏造されることもあったのである。たとえば、イギリスの出版社ウェッセルが『スケルツォ第一番』に「地獄の宴」という標題を勝手につけて出版したとき、ショパンが激怒して抗議の手紙を送ったといったようなこともあった。

そこでリストは、聴衆のイメージを作曲者の意図と近づけ、勝手な物語を作られることを防ぐために、音楽に「標題」をつける「標題音楽」を提唱したのである。

### 〔三〕絶対音楽

「標題音楽」に對置するものが「絶対音楽」である。これは、テキストやプログラムを一切もたない音楽こそ本来の姿とする考え方で、元来はワーグナーが『オペラとドラマ』（一八五二）の中で否定的に用いるまでは存在しない用語だったらしい。

「絶対音楽」という言葉は、オーストリアの批評家ハンスリックが、ワーグナーを攻撃するために用いたものであったが、そのことが逆に「絶対音楽」の神話性を高めることとなった（カール・ダールハウス『絶対音楽の理念』）。

すべてを「詩化」して聴くのが当たり前だったロマン派精神に覆われていた十九世紀が過ぎ、二十世紀になると、全く逆の現象が起きた。「絶対音楽」が「標題音楽」よりも高く評価されるようになったのである。

その結果、音楽は言葉から切り離され、純粹に音による芸術として分析的・構造的に聴かれるようになり、すでに二十一世紀に入ったこんにちでも、その傾向は続いている。

現在、演奏会のプログラムの曲目解説に、一般聴衆には異界の言語としか思えない専門的な楽曲分析用語が並べられたものが多いのは、こうした考え方に端を発したともいえよう。

### 《三》料理の名前

〔国・地方・場所に由来するもの〕

Fillet de sole a Normande（ノルマンディー風舌平目料理）

エビ・ムール貝・カキ・ザリガニ・小魚のフライ・トリュフ・マッシュルームが入り、N字型に切り抜いたパンのトーストを飾る舌平目のクリームソース料理。

Potage Saint-Germain（ポターージュ・サンジェルマン）

サヤエンドウのポターージュスープ。

〔職業・社会身分に由来するもの〕

Sole meunière（粉屋風舌平目）

定番料理、舌平目のムニエルのこと。粉屋風とは、小麦粉をまぶす所から付けられた。バター焼きされる。

## Riz a l'Impératrice (若鶏の狩人風)

若鶏のソテーに炒めたマッシュルーム・エシャロットを入れて白ワインと鶏のだし汁を加えて煮詰めたソース(シャスール・ソース)をかけた料理。または、煮込んだ料理もある。

「人の名前に由来するもの」

## Pêche Melba(ピーチ・メルバ)

一八八九年、ロンドンのサヴォイホテルの料理長だったエスコフィエが、当時最高の歌姫と言われたオーストリアのネリー・メルバの声に魅せられ、彼女の出演した歌劇『ローエングリン』にちなみ、氷で作った白鳥の器にバニラアイスクリームを盛り、その上に桃のシロップ煮を飾って作られたデザート。

## Rognons de veau Chateaubriand(子牛の腎臓シャトーブリアン風)

グリルした肉に、ベアルネーズソースかメートル・ドテルバターを添え、シャトーブリアン切りしたジャガイモのソテーを付け合わせにした料理。王党派政治家でフランスロマン主義文学の先駆けともいえるシャトーブリアンは美食家で、彼の料理人ミレイユが牛ヒレ肉の中央から切り取った大きな厚切り肉をグリルした料理を考案、主人をたたえてその名をつけたことから、ヒレ肉の最上位をシャトーブリアンとも呼ぶようになった。

伝統的な古典料理から現代のものに至るまで、フランス料理には名前を聞いただけでも想像力を喚起させられるような、詩的なレトリックに満ちた命名がなされているものが少なくない。

フランス料理では、王侯貴族や歴史上の偉大な人物(あるいは料理人自身やその主人)、時代の寵児、記念すべき場所、有名な産地、逸話や神話

などの登場人物の名前を料理につけることがよく行われる。料理だけでなく、その背景に設定された過去・現在の栄光や、美しい物語、なつかしい夢も、ともに味わうのである。

おもな命名者は、王侯貴族に近侍していたり、華やかな世界に生きる人々を顧客するような名だたる料理人だったこともあって、このような名称が付けられ伝えられることは、この上ない名譽であった。

ワーグナーの歌劇「ローエングリン」の第一幕が、シュルト河を白鳥にひかれた小舟が騎士をのせてさかのぼってくるところから始まるのをイメージして、氷で白鳥をつくり、広げた翼の上にアイスクリームと桃のコンポートをのせ、糸のようなあめで飾った豪華なデザートは、エスコフィエを知らずして、フランス料理を語るべからずと言わしめた、天才料理人エスコフィエによって作られた。当時人気のプリマドンナ、ネリー・メルバに捧げられた、そのデザートが、製法そのままの「桃のシロップ煮のセバニラアイスクリーム、フランボワーズソース掛け」という名称だったならば、これほど有名にはならなかっただろう。アイスクリームの歴史をひもとくと、必ずといってよいほど登場する「ピーチ・メルバ」は、その名称由来とともに伝説となったのである。

## 《四》「標題」をめぐる事件―「登録商標」という標題世界―

現代では、書籍・音楽・演劇などのエンターテイメントにおける各作品に「標題」は不可欠といってもよい存在になっている。しかも、「標題」が付与される対象はそれだけに限らない。工業・農業・サービスなど、およ

そ人間の社会生活に関連するさまざまな生産行為にわたって存在しているのである。

現代の「標題」が、古典時代のものとは最も大きく違う所は、現代の「標題」には「登録商標」として巨大な富を生む「知的財産」へと変貌している点にあるだろう。

「登録商標」(registered trademark)とは、特許庁で商標登録を受けている商標をいう。

商標法の規定によれば、

一 業として商品を生産し、証明し、又は譲渡する者がその商品について使用をするもの。

二 業として役務を提供し、又は証明する者がその役務について使用をするもの。

が対象となっており、文字、図形、記号に対してだけでなく、それらに立体的形状や色彩などの意匠の加えられたものを「登録商標」と規定し、略して「標章」ともいわれる。

登録商標の有効期限は設定の登録の日から十年で、商標権者の申請により更新することができるが、一方で、それ自体で高価な資産価値を有するマーケットを形成している。

たとえば、ヨーロッパの諸都市の多くは、すでに「商標登録」がなされてしまっており、その最大の権利者が日本企業であるというのは有名な話である。そのため、当の住人が、うかつにご当地名を付した商品を開発・販売する権利を持ってないという笑えない状況に至っているらしい。

このような例だけでなく、およそ森羅万象のあらゆる名称が「登録商標」と化しているともいわれる。そのため、二重登録を防ぐためにも「商標」の

情報は「特許庁商標公開データ」が公開されており、その情報を検索するためのサービスも存在している。

これほどまでに複雑な権利関係を持つ「登録商標」だけあって、当然のことながら、それをめぐっての、悲喜こもごものさまざまな「事件」も発生している。

## 「一」ポリューションそこなわれたブランドイメージ

著名となった表示の中でも、特に高級イメージが定着している商品や営業の表示が、低俗あるいは低価値の商品や営業に使用されてしまうことになる、その表示の高級イメージは汚染(ポリューション)されることになる。これをポリューション現象という。

古来より先行作品、前代の権威を借りて、作品名にその名称を借りることが数多く行われてきた。「柳の下ドジョウを狙う」ということわざもあるくらいだが、「ポリューション」は、そうした行為(冒用行為)が引用元の権威を損なうものであると判断された場合、古い言い方をすれば、「のれんに傷をつける」現象が引き起こされることをさす。

本報告集掲載の安保論文で俳諧撰集の書名についての論争が扱われているが、俳諧の立場に立てば、パロディ・もじりなどということ、そこに文芸的意匠も認められる肯定的な評価もできようが、権威を侵された側の和歌・連歌の立場からすれば、現代でいうところの「ポリューション」となるわけである。

現代の事例をいくつか紹介しよう。

## (一)冒用者の業種性格や営業手法と関係している場合

### ①日本ソニー事件・神田ソニー事件

電機メーカー「ソニー」の名前がサラリーマン金融会社(サラ金)の社名に使用されたことに対し、サラ金という業種に関してポリューションが認定された。(東京地裁昭和五九年三月一二日判決)

### ②豊田商事事件

自動車大手メーカー名の「トヨタ」を冒用して詐欺商法に使用されたことで、営業手法が悪徳であることに関連してポリューションの発生が認定された。(東京地裁平成四年四月二二日判決)

## (二)高級イメージに対するポリューション

高級イメージが定着している商品や営業の表示が、大衆向けや低価値の商品・営業に冒用されることになれば、その標識の高級イメージは汚染されることになる。

### ①西日本デイズニー事件

パチンコ店名に「デイズニー」が使用されたケースに対してポリューションが発生。(福岡地裁平成二年四月二二日判決)

### ②ニナリッチ事件

「ニナリッチ」が東京都八王子市に開業していたノーパン喫茶の店名に使用され、香水、高級アクセサリー等で有名なブランド名が著しく品性の低いノーパン喫茶の営業に何らかの関与をしているものと需要者又は取引者に誤信されて原告の信用を毀損したとして、ニナリッチが提訴し、ポリューションが認定された。(東京地裁昭和五九・一・一三判決)

## (三)異なるイメージを持つ商品のポリューション

イメージが全然合わない商品や営業に使用された場合、それが低価値の商品や営業ではなくても、ポリューションが発生したと判断される場合もある。

たとえば、「健康食品」として有名になったブランド製品が「トイレ洗剤」に同名で使われた場合には、商品の価値の問題ではなく食品とトイレという、全く異なる生活場面のために商品イメージが損なわれると判断される。

## (四)有名になりすぎたがための悲喜劇

「ホッチキス(ホチキス)」「万歩計」など、日常生活で普通名詞的に使用している品目にも商標登録がなされているものがある。

「ホチキス」は、人の名前・会社の名前・商品名である。ベンジャミン・B・ホッチキス(一八二五〜一八八五)が発明し、弟のエーライ・H・ホッチキスが合衆国コネチカット州にE・H・ホッチキス社を興して作られた商品を、明治三十六年ごろ国内販売した伊藤喜商店(現在の株式会社イトーキ)によって、日本で商標登録がさなれ、現在に至っている。普通名詞としては、針を止める方を「ステイプラー」、「ホッチキス(ホチキス)」の方を「ステイプル」と呼ぶ。

一方、「万歩計」は、山佐時計株式会社の登録商標で、普通名詞としては「歩行計」となる。

そのほか、「ティーカップ」(東京ドーム)、「ホワイトチョコレート」(六華亭)、「ポリバケツ」(積水化学)、「セロテープ」(ニチバン)など、ヒット商品が普通名詞と化したかのような扱いを受けているものは少なくない。

そのため、マスコミでは、この種の製品名の表現には特に気を付けている。

うっかり「安物の〇〇〇」などと言おうものなら、たとえ意図してはいなくても、その特定製品を誹謗することにはかならないからである。

## 〔二〕 標題で生じる巨大権益

### （一）GODZILLA松井

二〇〇二年十一月、プロ野球巨人球団の松井秀喜がアメリカ・メジャーリーグに移籍することを決意。メジャーでの選手登録名称を、日本でのニックネーム「ゴジラ」にあやかり「GODZILLA」にすることとした。ところが、「GODZILLA」は映画の登録商標であるため、アメリカでユニフォームに「GODZILLA」の入った姿を披露するには、規定の著作権使用料が必要とのこと。しかし、このような場合は、登録された商品の広告にもつながることゆえ、特例が適用されるらしい。

また、宮崎駿監督のアニメーション映画『魔女の宅急便』は、「宅急便」の商標登録元のヤマト運輸とタイアップすることによってスポンサーと作品宣伝の相乗効果が果たされた好例といえよう。

### （二）数字のアナグラム

自動車ナンバー、電話番号では、数字の配列自体に意味や価値が生じている。おり、七七七七などの同一数字が連続（ゾロ目）したものや、〇一四一のように、特徴的な語呂合わせのアナグラムを構成するものなどは、その番号自体が高価な商品価値を生んで取引が行われている。そして、このような現象は、新しい通信メディア、機器、システムなどの普及とともにますます多様化している。

## （三）標題で国連加盟ができた国

インターネットのホームページアドレスに付けられるドメイン名は、世界中で使用されることから、それをめぐって電話番号以上に巨大な権益が生まれている。中には、そうした商品価値をあてこんで、あらかじめ価値を生みそうな企業名、商品名に関係ありそうなドメイン名を先行取得しておき、当該企業に高く売りつけるという行為も盛んに行われている。

その一方で、ツバル（TUVALU）のように、まさに「棚からぼた餅」のごとき幸運が降ってわいた国もある。

ツバル国は、オセアニア諸島にある島国。九島あるポリネシア諸島の一つで、フィジーの東に位置する。首都はフナフチ、ツバル語と英語を公用語とする。オーストラリアドルを通貨とする。

ツバル国民の主な収入源は漁業で、国土の半分は最近まで電気が通っていなかったが、そのような国にカリフォルニアの企業Dot TVが接触をはかってきた。

一九九一年にインターネットのアドレスとして各国にドメインが割り振られたとき、ツバルに「tv」が当てられたからである。

ツバルは「tv」ドメイン使用権として、Dot TVが同社の株式の一部を譲渡し、二〇〇二年から十年間にわたって合計五〇〇〇万ドルを支払うことで合意した。人口一〇、五八八人（一九九九年推定）、GDP七八〇万ドル（一九九五年推定）の小国が、突然巨万の富を手にしたのである。

同様の引き合いはこれからも続き、ついに、ツバルは初めて国連への正式加盟に応募し、参加費を支払うことができるようになった。参加費はツバルの場合は三万ドルであった。

実は、ツバルは地球温暖化による海面上昇により、国土消滅の危機にある。現在、ニュージーランドへの段階的移民を進めているが、ドット革命とも呼ばれる通信革命が、思わぬところで威力を発揮した出来事であった。

## 《五》 標題学の可能性

### 〔一〕 標題と情報

そもそも「ものごとに名前を付ける」(命名)という行為は、元来は「神」の所行にも近いもので、必ずしも個人の恣意性にゆだねられたものではなかった。

名前を付けるという行為には、二つの次元を異にする行為が含まれる。一つは、その存在を独立の者として認知せしめるという行為。また一つには、そうして独立した存在のものとなった事物に対して、名称を付与する(ラベルをはる)という行為である。

人間は、自然界の事物に言葉を与えること、すなわちある対象に言葉で名前を与えることによって、自然界を分節することとなった。

自然の事物に名称を付け、それを社会的に認知させるという行為は、神にも等しい重みを持つ。現代でも、その行為を人生の榮譽とする人たちは数多い。たとえば、新発見の星に自分の名前を付することを目的とする人をはじめ、新発見の事物、理論、思想など、その行為の価値は、分野・時代・地域を問わぬ普遍的なものといえるかもしれない。

一方、ノバート・ウィナーがサイバネティクス理論に関連して論じた「す

べてのものは物質・エネルギー・情報からなる」という言葉は、「情報」というものの重要性を喚起するとともに、「情報学」という新興の学問を、すべての分野の基盤科学に押し上げる理論的バックボーンとなり、現在に至っている。

情報は、「人が相互に行うコミュニケーションにかかわるもの」とする程度の理解でも間違いではない。しかし、それを成立させる「意味性」が情報には含まれており、逆にすべての情報が「意味性」を有しているということもできる。存在するものが、すべて情報で規定されて存在しているゆえに、人間はそれを解明し、解釈して情報にできる。

そして、「名前」や「標題」は、たとえそれが内実と異なる情報であっても、はなはだしくは、意味を持たず、中に何も存在しないものであっても、实在可能とする機能を有する。

「名前」や「標題」は「情報」の入れ物ではあるが、双方の関係ではきわめて密接で、ウィナー的表現を試みるならば、「標題や名前があれば、すべてのものは存在可能である」といった表現も可能であろう。

### 〔二〕 部類標題のオントロジ

#### (一) オントロジということ

哲学术語「存在論」に由来する「オントロジ」は、情報学においては「概念間の関係の明確な定義の集まり」として、知識や用語の「概念木」として使われるとともに、情報リソースから独立した上位層に位置付けられている。いわば、情報資源に、知識概念木の形成された「標題」を自動的に立てることによって、情報を意味的に組織化、検索、ナビゲートするための

もので、現在、新しいパラダイムとして注目を集めているものである。

「オントロジ」とは、元来が哲学用語で、「存在論（存在に関する体系的な理論）」とも訳されてきた。この場合「論」がつくことから分かるように、学問の一分野を指すことになるが、知識工学の側からは、一九八〇年代半ばの第五世代コンピュータ開発プロジェクトの頃に提唱され、近年再び脚光を浴びつつある概念である。

端的に言えば、「すでに存在する知識体系を分類・集約し、その成果をコンピュータを利用することによって人間科学に反映させる」とでもまとめられようか。その意味で、オントロジの志向するところは、グローバルな意味での標準化とは対極的な所にあり、「適切なサイズの領域内に蓄積された知識を積み上げる」ことにより、実世界の知識を扱うための基礎理論から技術までを再構築することを目指している。

この概念の名称自体は、文学研究においては「オントロギ」という用例の方が熟していたようだが、これは原義に則した「存在論」あるいは、事象の「底流」「（心理学的・社会的）基盤」の意味で使用されるものである。

一方、情報学的見地からは、オントロジは、用語モデルにおける知識構造として捉え直されている。そして、現在、用語の標準化による知識共有の基盤技術として、その重要性が再評価され、実装も進みつつある。

その背景の一端には、知識という一般的命題を直接考察の対象にした知識工学が行き詰まり感を持ち始めたという認識が生まれたことがある。

オントロジ的とらえ方では知識を構成する基本概念に立ち戻っての考察が行われることに特徴がある。すなわち、知識の階層性、コンテキスト依存性、知識の分解可能性などを注意深く考察することによって、物事や対象の成り立ちを基本から検討し、知識ベースが持つ様々な問題を回避するこ

との糸口を与えることが期待されるのである。

そうしたコンセプトは、具体的には、情報検索に際して、それぞれの知識構造に沿ったソーラス辞書群を基に、ユーザ個別の要求、すなわち「個」に特化した、最も目的に適った検索や知識の発見（データマイニング）を求めるという考え方への転換となって反映される。

オントロジモデルでは、さまざまなレベルの概念カテゴリー間の相互関係を示したものが使われる。よく使われるのは、「すべての概念の集合」を木の根に見立て、そこから特定の性質を持った概念の集合を代々枝分れさせていくもので、概念木ともよばれる。

これは、知識構造をモデル化したものともいえる。知識構造はカテゴリ単位に分類され、カテゴリには分野別に分類された概念階層の木（ツリー）が複数存在する。ソーラスにおける概念階層木は、ある概念を表す用語の上位・下位概念を表す用語へのリンクから構成され、各概念は概念名、同義語、意味を定義する述語論理によって定義される構造を基本としている。

こうした知識構造モデルの構築は、「人間」というものの認知構造の仕組みを「一般性」普遍的に捉えることを究極目的とすることの観点から、これまで「汎用性」ということを重視して進められてきた。

もっとも、「汎用性」「一般性」という定義自体、極めて相対的なもので、そもそも「日本語」という括り自体も我々からすれば大きな括りに見えるが、国際的には極めて局所的な存在とならざるを得ないものである。

しかし、我々が歴史的、文化的に培ってきた概念の豊かさは、そうした局所的な集合の中にも膨大に存在する。しかも、限られた分野における概念体系にこそ、情報爆発の被害を免れた、確度の高い情報が保全されている。その意味で、量に圧倒された傷を受けることなく構築が果たされた、



分類体系という情報資源というものは極めて貴重である。

## (二)部類標題ということ

ものごとを「類」という概念で整理・体系化することは、人間の認知活動において自然に行われることである。同時に、和漢の古典学世界でも基本的な学問態度であった。独自の新しい学問世界を打ち出す以前に、博学多識を旨とする過去の知識の集成が行われることが重んじられ、そうした態度こそ、学問と考える意識の方が強い傾向を持っていた。

それゆえに、古来より、今日的な表現で言うところの情報処理技術は紙の上で具現化されてきた。「類書」「辞書」「字典」「百科全書」「部類書」、さらには、「注釈」など、およそ構造を持った諸典籍類などをも包摂するテキスト群に叡智が注がれ続けたのである。

和漢古典籍の類聚編纂物は、物事を「類」(近似するもの)概念で集積し、整理・体系化を施したものである。その認識は世界内存在全てを志向し、階層的に表現された知識体系は、それ自体がミクロコスモスを形成する「分類概念語彙」、あるいは当時の表現を借りるならば、「部類」のための「標題」、すなわち「部類標題」によって統御されていた。

## (三)世界を記述すること

「類書」「辞書」「字典」「百科全書」などの類聚編纂物が、「世界の認識と記述」を志向するとは、よく言われることである。

その記述の対象は、自然界・人間界の全領域(思想・制度・行為)に及び、たとえば、「類書」では、「天象・人事・神仏・山地・禽獸・草木……」などといった配列とともに階層化(秩序付け)が図られる。

一方で、これらとは別の観点で、配列基準を有限個に設定し、その原則でもって世界を記述しようとするものもあった。その規則として代表的なものとしては、「部首」・「韻(漢字音・五十音)」、あるいは独自に設定され、親しまれてきた規則、たとえば「いろは」「千字文」「アルファベット」などである。これらにも、配列原則に世界認識が意義付けられ、「円環知」などという名称も使われている。

一般的には、前者の配列方法に比べ、後者のような有限個の配列規則を設定する方法登場は遅れる。それは、配列原則が理解出来なければ検索行為が成り立たないからである。「五十音図」「アルファベット」などの配列規則が周知され、落着きを見せるのは歴史的にもかなり遅れる。

しかし、後者の方法においても、配列された見出し語の属性に、前者に見えるような階層的知識体系の樹形図が埋め込まれているものがほとんどである。両者の関係を現代的にたとえば、「目次」と「索引」との関係にもたとえられよう。

いずれにしても、配列規則・属性(分類概念)、さらには概念間を接続する関係といった規則は、歴史的に見ても多様に存在する。しかも、これらはいずれも情報爆発の被害を免れた、確度の高い情報が保全されたものばかりと言え、きわめて継承性が強いことを特色とする。

## (四)部類標題語彙の継承性

試みに、中国における類聚編纂物七種と日本の『和漢朗詠集』、そして一九六八年当時における語彙調査資料である『分類語彙表』の中から、漢字列文字列のみを抽出し、共通する語彙を各典籍ごとに個別に比較し、まとめてみた(別表参照)。比較方法は単純だが、根拠を要する作業ではある。

また、標本数の追加が今後の課題だが、このことからでもさまざまなことがわかってくる。

まず第一に、挙例の各典籍間の親疎の度合いが、語彙の一致率比較によりある程度判明することである。たとえば、『李嶠百廿詠』『芸文類聚』『初学記』『事類賦』の四種は、いずれも、平安期以前の漢詩文の表現における影響の指摘される典籍群だが、分類用概念語彙の一致立から見ると、きわめて類縁性の高い典籍群として位置づけられるということが言える。

次に、分類用概念語彙に使用される語句は、少ないものでもその四分の一が、多いものではその半数が現代日本でも使用されているということである。このことは、各古典籍中の分類語彙を『分類語彙表』と比較することにより求められた結果である。

そして一致する語彙は、自然景物・年中行事・人事関係の語彙に集中している……などである。

標本数が少ない故、これ以上の言及は避けるが、稿者は、現在これらの語彙群を、典拠・成立・分野など、さまざまな切り口で集積し、用途毎に分節化することも構想している。

## 《六》まとめにかえて

以上、研究の可能性を探る意味もあって、さまざまな領域に手を伸ばし、考察を試みた。

残念ながら「標題」を考える上で重要な領域のひとつ、絵画については今回言及が及ばなかった。それについては、現在「部類標題」との関わりの中で考えており、今後の課題としたい。

それにしても、「標題」から広がる世界は、本当に多様でかつ魅力に満ちている。しかも、研究を進める中で痛感したことは、それぞれの学問領域・分野の中で、類似の問題意識が底流していながらも、これまで横断的な考察が試みられていなかったことである。第五章に「標題学」という見出しを付けたが、そのような言葉が成り立つほどに、この分野は奥行きが深く、魅力的な課題に充ち満ちている。

今後、どこまで広がるか、あるいはどここの領域をさまようか、楽しみである。

## 【参考文献】

### 《二》標題音楽と絶対音楽

青柳いづみこ『水の音楽―オンディーヌとメリザンド』第5章（みすず書房、二〇〇一・九）

野本由紀夫『時代が変えた標題音楽』（「フィルハーモニー」一九八七・四）

カール・ダールハウス…著、杉橋洋一…訳『絶対音楽の理念―十九世紀音楽のよりよい理解のために―』（シンフォニア、一九八六・三）

### 《三》料理の名前

ジャン＝フランソワ・ルヴェル『美食の文化史』福永淑子・鈴木晶訳（筑摩書房、一九八九）

塚本昌則・岡本麻理恵『レストランのフランス語―ことばを味わう―』

(田村毅・月村辰雄：編『フランスの言語文化―フランス語の文化誌―』二〇〇三・三、放送大学教育振興会)

<http://www.iccream.or.jp/episode/page04.html>：日本アイスクリーム協会アイスクリーム小話 [2003.2.1 参照]

#### 《四》「標題」をめぐる事件―「登録商標」という標題世界―

商標法平成十一年四月一日施行版 第一章総則 第二条定義等。

<http://ensis.jura.niigata-u.ac.jp/~w-semi/resume1999/yamamoto/1215yy4.htm> (2002.12.10 参照)

<http://ensis.jura.niigata-u.ac.jp/~w-semi/resume1999/yamamoto/1215nm.htm> (2002.12.10 参照)

<http://www.zdnet.co.jp/news/0009/07/tv.html> (2002.12.10 参照)

#### 《五》標題学の可能性

平田周「可能態としての反情報概念―情報の本質と情報生成過程に関する考察―」(『情報知識学会誌』11、情報知識学会、二〇〇一・四・二八)

ノーバート・ウィーナー：著、池原止戈夫：他共訳『サイバネティックス―動物と機械における制御と通信―』(一九六二・一〇、岩波書店)

相田満「和漢古典学におけるオントロジ・モデルの構想」(『情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ』二〇〇一・CH・52、情報処理学会、二〇〇一・一〇・二二)

溝口理一郎「オントロジ―工学の試み」(『一九九八年度人工知能学会

全国大会 AI レクチャ」[[http://www.ei.sanken.osaka-u.ac.jp/japanese/about\\_us/ontological-engin-jpn.pdf](http://www.ei.sanken.osaka-u.ac.jp/japanese/about_us/ontological-engin-jpn.pdf)] 2001.6.1 参照)

武田雅哉『蒼頡たちの宴』(ちくま学芸文庫、タ―四―一、一九九八・五・八、筑摩書房)

『分類語彙表』(国立国語研究所編、秀英出版、一九六四・三初版、大日本図書、一九九四・二・一、FDD版)

【表】日中の古典的類聚編纂物間の分類用語彙の一致率比較および現代語（分類語彙表）との比較

地域・時代	撰者	件数 一致率	呈覧	釈名	北堂書鈔	芸文類聚	初学記	李嶠百廿詠	事類賦	和漢朗詠集	分類語彙表	書名 件数／横欄（のべ数）
中国・魏	文帝	呈覧	2 2	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	/2(2)
中国・漢	劉熙成	釈名	0 0%	27 0%	3 11.11%	6 22.22%	5 18.52%	3 11.11%	7 25.93%	2 7.41%	15 55.56%	/27(27)
中国・隋	虞世南	北堂書鈔	0 0%	3 0.35%	847 14.52%	123 14.52%	85 10.04%	39 4.60%	26 3.07%	7 0.83%	170 20.07%	/847(874)
中国・唐	歐陽詢：等	芸文類聚	0 0%	6 0.81%	123 16.51%	745 16.51%	124 16.64%	88 11.81%	87 11.68%	33 4.43%	174 23.36%	/745(773)
中国・唐	徐鉉：等	初学記	0 0%	5 1.48%	85 25.15%	124 36.69%	338 23.67%	80 24.85%	84 24.85%	31 9.17%	120 35.50%	/338(340)
中国・唐	李嶠	李嶠百廿詠	0 0%	3 2.27%	39 29.55%	88 66.67%	80 60.61%	132 47.73%	63 16.67%	22 16.67%	64 48.48%	/132(132)
中国・宋	呉叔	事類賦	0 0%	7 6.31%	26 23.42%	87 78.38%	84 75.68%	63 56.76%	111 24.32%	27 24.32%	55 49.55%	/111(116)
日本・平安	藤原公任	和漢朗詠集	0 0%	2 1.53%	7 5.34%	33 25.19%	31 23.66%	22 16.79%	27 20.61%	131 24.32%	59 45.04%	/131(134)
日本・現代	国立国語研究所	分類語彙表 中の漢字語彙	0 0%	15 0.08%	170 0.95%	174 0.98%	120 0.67%	64 0.36%	55 0.31%	59 0.33%	17,835 0.33%	/17,835(22,608)

〔注記〕

分類語彙表中に含まれる上記資料中の古典語彙は  
409語  
(分類語彙中では2.29%、古典語彙全体では23.44%)。  
左下側は縦覧の一致件数／縦覧の標題件数  
右上側は横覧の一致件数／横覧の標題件数  
「分類語彙表」の標題件数は、漢字列のみで重複  
のない語彙を抽出した数  
(平仮名・カタカナを含むものの総計は31,999件)  
したがって、「水」(Wednesday)と「水」(Water)は  
一語として扱う

★出現頻度	★出現頻度上位(出現頻度6以上の)の一致語★
9	立春日
8	落花
8	鈴地
7	油
7	喪服
7	夏
6	海水
6	盤
6	流刑
6	博士
1.1631	分類語彙表
1.553	分類概念
1.456	節・節日(1634)
1.524	枝・葉・花など
1.5111	楽器
1.421	地形・山野
1.1624	鉞物
1.513	衣服
1.415	季節
1.3612	水
1.234	輪・車・棒・管など
	刑
	人物